

特 集 コミュニティの再生・創生と宗教

グローバル化を体現する宗教共同体

—イスラーム、アフマディーヤ教団—

嶺崎寛子¹

世界中に多くの信徒がいるイスラームの少数派、アフマディーヤ。本国での迫害、越境を経て、グローバルな宗教共同体として急速に発展している。教団の実態に迫り、教団が言語や地域を超えて隆盛を誇る理由を、文化人類学的なフィールド調査に基づいて考える。

¹ みねさきひろこ：愛知教育大学准教授

1. グローバルかつローカルな宗教共同体—アフマディーヤ

地域共同体が解体しつつあるといわれる。「無縁社会」も流行語となった。そのような状況下で3.11以降、希薄化する人間関係をつなぐもの、地域共同体に根付くものとして、宗教が再評価されている (cf. 星野・櫻井 2017)。世界に目を転じれば、IS (Islamic State) が国民国家の境界をたやすく乗り越えたように、国民国家とそのシステムのほころびが一層際立っている。人間関係が希薄化し、国際移動が増え社会が流動性を増す今、グローバルな宗教共同体に注目する意義とは何か。

宗教共同体の刮目すべき点は、地域共同体に根づくだけでなく、広域ネットワークをも併せもつことである。宗教と震災研究では宗教共同体が地域に根付いていることに耳目が集まりやすいが、広域ネットワークも重要である。被災していない地域の信徒の人的・物的支援を広域ネットワークを使って被災地に届けたことが、援助成功の背景にある。広域なものと同様に根付いたもの、両方のネットワークゆえに支援は奏功したのである。

本稿では、国家を超えたグローバルなネットワークと、相互補助機能をもつローカルな組織とを併せもつ、グローバルかつローカルな宗教共同体として、アフマディーヤ (Ahmadiyya Muslim Community, *Tahrīk Jadīd Anjuman Ahmadiyya*, 日本支部の正式名称は日本アハマディア・ムスリム協会。慣例により以後アフマディーヤと表記) を論じる¹⁾。グローバルかつローカルな宗教共同体として、教団はグローバル化が進むポスト植民地時代である現代を、ある意味で余すところなく体現する。それはナショナル・アイデンティティを超え、またはそれと併存するグローバルなアイデンティティのあり方と、グローバルでありながら同時にローカルな相互扶助の機能²⁾をも併せもつ宗教共同体の可能性とを、我々に示してくれるだろう。

近年ムスリムの主な移民先である欧米で、移民2世によるテロ事件が相次ぐ。ムスリム移民2世はホスト社会のなかで就業機会を得られず孤立する傾向があり、それが彼らの過激化の一因となっている。フランス

をはじめ欧米諸国の一部や日本では、移民への同化圧力も強い。しかし移民が出身文化を捨てホスト社会への同化を目指すことは、実はリスクが高い。ミシェル・ヴィヴィオルカは「これといった集合的な経済的・文化的資源がないこともあって、(移民2世は)社会的に弱体化された存在として現れる」と指摘した(ヴィヴィオルカ 2009:147)。出身文化を同じくするローカルな共同体は、就業や学業、住まいなどに関する情報を提供し、孤独感を癒すなどの機能をもつ、移民たちの経済的・文化的資源でもある。この点からも、ローカルな宗教共同体は、移民にとって重要な意味をもつ。

アフマディーヤは教義ゆえにパキスタン政府から迫害され、英国に本部移転した歴史をもち、信徒にも迫害による越境経験者が多い。彼らは宗教的迫害によるディアスポラであり、欧米にも信徒が多く住む。教団はホスト社会への同化ではなく、宗教や文化を保ったままの共生を志向する。異文化のなかで暮らす彼らの、各国支部内での信徒間のつながりは強く、相互扶助の精神が根づく。彼らは国家よりも重要な帰属先として、しばしば宗教共同体を意識的に選択する。本稿では本教団を事例に、国際移動が盛んなグローバルな高度情報化社会のなかでこそ可能となった、地域・村落共同体にも、同一言語・同一民族を志向する国民国家を前提としたナショナリズムにもあてはまらない、宗教共同体のあり方とその可能性を探る。

教団は中東地域では知名度が低いが、欧米では前述のように一定の存在感を持ち、東南・南アジア、西アフリカでは知名度が高い。現在日本には愛知県と首都圏を中心に約240名の信徒が住む。単身来日した男性が後に結婚したり本国の家族を呼び寄せたりした一家が多い。日本生まれの2世の多くが適齢期を迎え、3世も生まれている。日本に帰化した信徒もいる。

なおアフマディーヤは主流派ムスリムからは特殊な教義により異端とされ、信徒はムスリムではなく不信仰者(*kāfir*)とみなされる。拒否反応を示す主流派ムスリムも多い。しかしそもそも、ムスリムとは誰なのか。原則的には、五行の第一である信仰告白を公言する者はムスリムと

して扱われる（小杉 2002：969–970）。しかし現代では、ムスリムの定義はテロや政治と密接に関わり、誰がムスリムかという問は否応なく政治性を帯びる。誰がムスリムか、真のイスラームとは何か、という定義をめぐる言説闘争がイスラーム圏で今、様々な主体によってなされている。イスラーム過激派からは、彼らの主観による定義から外れたムスリムを非ムスリムかつ敵とみなし、テロの対象とする新たな論理、タクフィール主義も生まれた（保坂 2016：84）。

そもそも、ムスリムの定義権は誰にあるのか。定義づけるという行為はつねに権力の営為である。非ムスリムの筆者にはムスリムを定義する権利も動機もない。したがって本稿でのムスリムの定義はごく単純に「ムスリムと自認する者」とする。

なお本稿は2012年5月から現在まで、主に日本、必要に応じて英国およびパキスタンで継続的に行った、文化人類学的手法によるフィールド調査に基づく。

2. 概史と教義

イスラームのスナ派には「終末の前に不信仰者 (*al-Dajjāl*) が現れ世は乱れるが、救世主 (*mahdī*) がキリストとともに不信仰者を滅ぼす。さらに救世主は世の乱れを正し、真のイスラーム共同体を築く」という救世主信仰がある。アフマディーヤは、英領インド、パンジャブ州カーディヤーン生まれのミルザ・グラーム・アフマド (1839–1908) こそ、預言者にしてこの「約束された救世主」であるとみなす、1889年に興ったスナ派系の新宗教である。教義の特徴は開祖を預言者と認める点、徹底した平和主義、政教分離の容認にある。預言者性関連の教義はかなり特殊で、ブッタやクリシュナなどを預言者と認め、開祖は救世主であるのみならず、預言者ムハンマドに続く預言者であり、さらにイエスやブッタ、クリシュナ等の再来でもあるとする（ナディーム n.d.）。ムハンマド以降に預言者は現れないとする主流派イスラームと対立する教義ゆえに、主流派ムスリムからは異端視される。開祖は、「剣のジ



写真1 日本初の教団のモスクの外壁に日本語で刻まれたスローガン

ハード（聖戦）の時代は終わり、これからはペンのジハードの時代である³⁾として、暴力を徹底的に排除した。この徹底した平和主義は教団のスローガン「誰も憎まず全ての人に愛を（Love for All Hatred for None）」に結晶している。

イスラームは政教一致が原則だが、本教団は政教分離を是とする唯一のイスラーム系団体である⁴⁾。政教分離の容認、国家尊重の姿勢は鮮明で、開祖は「宗教と政府という二つの聖域を、公正な魂をもつこと、忠実な国民であることによって守れ⁵⁾と説き、国を愛せと命じ（この文脈では国は英植民地政府を指す）、暴力を禁じた。政教分離は近代国家の要をなす原則である。欧米での海外宣教に成功した要因の一つが、この姿勢であることは間違いない。

開祖ミルザ・グラーム・アフマドの死後、教団は救世主の代理人（カリフ）を奉じるカリフ制を採用した⁶⁾。カリフは信徒の代表選挙で選ばれるが、開祖の高弟だった初代カリフを除く2～5代カリフは開祖の子孫であり、選挙といえど血縁が重視される。なおアフマディーヤは、オスマン帝国のカリフ制が廃された1924年以降、ISがカリフ制を宣言した2014年まで、カリフを擁する唯一のイスラーム団体であった（ただしアフマディーヤのカリフは預言者ムハンマドの代理人ではなく、救世主の代理人であることに注意）。カリフ制は教団の特徴の最たるもので



写真2 モスク開堂式の、教団旗と日本国旗を用いた飾りつけ

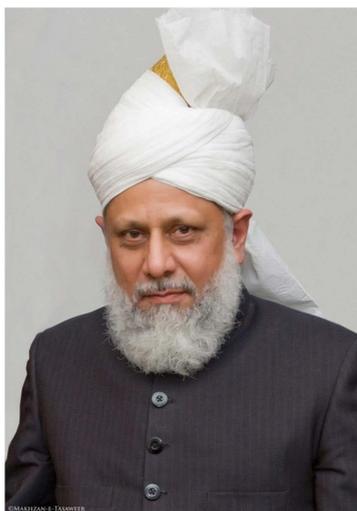


写真3 当代5代カリフ(写真提供：アフマディーヤ教団)

ある(詳細は後述)。当代5代カリフは開祖の曾孫、ミルザ・マスルー
ル・アフマド(1950-、在位2003-)である。

インドからのパキスタン分離独立に伴い、信徒らは1947年にインド
の本拠地カーディヤーンからパキスタンに集団移住し、48年9月にパ
ンジャーブ州に都市ラブワを建設、本拠地とした(Smith 1960；

Labeebgondal 2016)。アフマディーヤはムスリムとして、イスラームを国民統合の核とする多民族・多言語国家パキスタンを祖国とすることを自ら選び取ったのである。

しかし教団は、パキスタン国内ではイスラーム国家樹立を目指すイスラーム政党、ジャマーアテ・イスラーミーに敵視され、次第に迫害対象となった(子島 2002:112-113)。1952-53年には排除運動が活発化、53年には襲撃事件が起きた。74年に憲法改正によって非イスラーム集団とされ、制度上ムスリムの地位を喪失する。84年4月、ズィヤーウル・ハック政権により軍事法令第20条が施行、アフマディーヤはアザーン(礼拝の呼びかけ)の朗読、ムスリムとの自称、説教、布教のすべてを禁止され、違反者は3年以下の実刑もしくは罰金刑と定められた(Berberian 1987)。政府により迫害が合法化されたのである。85年には国連人権委員会にパキスタンのアフマディーヤの状況にかかる報告書が提出された。パキスタンではアフマディーヤを対象とするテロ事件や誘拐殺人事件が散発的に発生、多くの犠牲者が出ている。2010年5月28日にはラホールでアフマディーヤを標的としたモスク襲撃事件が発生、約80名が死亡、100名以上が負傷した。98年のパキスタン国勢調査によれば、全人口の0.22%、約29万人がアフマディーヤである⁷⁾。1984年の軍事法令施行直後に4代カリフ、ミルザ・ターヒル・アフマド(1928-2003, 在位1982-2003)が英国に亡命、以後事実上の本部は英国となった。本部はインドのカーディヤーン、パキスタンのラブワ、英国のロンドンと二度移転・越境した。彼らはインド・パキスタン分離独立に伴い、ムスリム国家パキスタンの国民となるべくインドからパキスタンへ集団移住したものの、異端の少数派として迫害され、パキスタン国民にいわば「なりそこなって」そこを追われた。植民地期のインドに興り、ポスト植民地期に発展した教団の歴史には、現代史と、国民国家の虚構性とが期せずして書き込まれている。

なお以上の理由により、オーストラリアやドイツなど一部の欧米諸国では、アフマディーヤ信徒の難民申請は比較的容易に認められる。ただし移民先も安全とは限らない。グローバル化につれ、パキスタンにおけ

る対立構造がそのまま移民先社会に持ち込まれる事例が散見されるようになりつつある。2016年にはロンドンで反アフマディーヤ・イスラーム団体「ハーティム・ナブワート (*Khatme Nabuwat*)」の活動が確認された⁸⁾。さらに同年3月には英国、グラスゴーでアフマディーヤ信徒の32歳の小売店店主が、イスラームを冒涇したとして殺害された⁹⁾。これは英国でアフマディーヤが信仰を理由に殺された初のケースである。日本でも2016年7月に愛知県飛島モスクで反アフマディーヤ・ビラが配られた。

3. 組織、人材、教育、メディア

3.1 組織

教団の特徴はカリフ制の採用、高度な組織化、宣教師養成制度および制度化された献身制度（後述、無償か廉価で教団運営を担う人材の登録制度）があること、出版・翻訳事業への注力、選挙制によるカリフや各国支部の代表の選出など民主的な組織運営、多言語戦略、ITや衛星放送を活用した多角的メディア戦略、次世代の宗教教育・信仰継承に意識的であることなどである。特に①高度な組織化と本部による組織の一元的管理、②宣教師養成大学などの自前の人材養成制度、③1994年開設の教団の衛星放送局による多言語での豊富な番組提供、電子新聞や月刊誌の発行等を通じた、世界規模の信徒向けメディアの提供は注目に値する。

現在の信徒数は公称によれば数千万、200カ国以上に広まる¹⁰⁾。34の言語別、40の国別HPがあり、29カ国で年次総会 (*Jalsa Salana*) を開催する¹¹⁾ (パキスタンでは迫害により、1983年以降開催がない)。信徒はパキスタンとインド、インドネシア、欧米に多い。長く開発支援を続ける西アフリカでも知名度が高く、多くの改宗者を擁し共同体に溶け込む。移民の宗教ではあるが、本部のある英国をはじめ欧米でも宣教

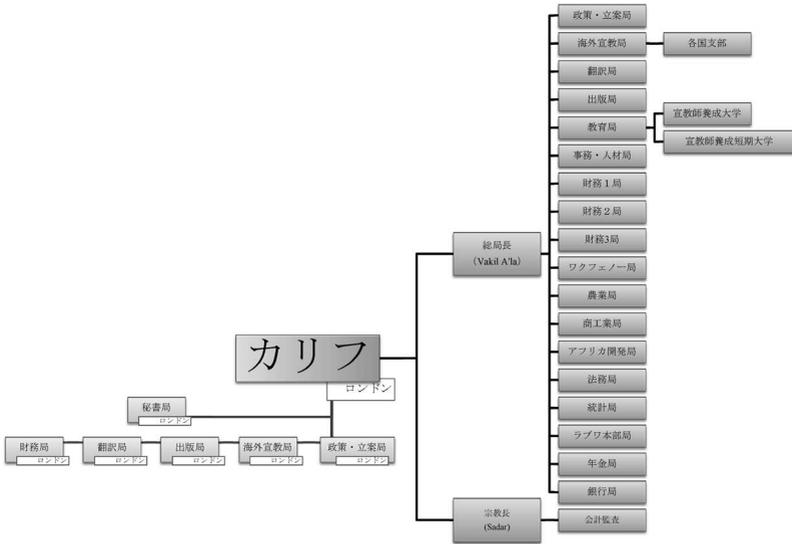


図1 アフマディーヤ組織図。Rules and Regulations of Tahrik Jadid Anjuman Ahmadiyya, p. 131 と聞き取り調査をもとに筆者作成

に一定程度成功、パキスタンではマイノリティだが世界規模では勢力を拡大している。アフマディーヤのよく組織された活発な海外宣教活動は有名である (Smith 1960)。彼らは、海外宣教を教団の根源的な存在意義とみなす。最初の海外宣教はモーリシャスで1915年から始まった。その後アメリカのフィラデルフィアで1920年、ナイジェリアで1921年 (Khurshid Ahmad n.d.)、日本で1935年にそれぞれ宣教を開始、1924年には英国初のモスクを、2015年には愛知県津島市に日本初のモスクを建てた。2012年現在、パキスタンに本部があった60年頃の信徒数50万人 (Smith 1960) をはるかに超える隆盛を誇り、世界各地に1万6千のモスク、500超の学校、30超の病院を擁する¹²⁾。

図1は教団の組織図である。教団のトップはいうまでもなくカリフで、その下に宗教長と総局長の二つの同列の職位が置かれている。宗教長は象徴的存在で実権は総局長にあるが、3年前から宗教長および総局長は同一人物 (Hameedullah氏) であり、二つの職位間の緊張はない。

彼は1980年代前半に総局長になり、現在は80代と高齢だが、長年にわたり影響力をふるってきたと推察される。総局長はカリフ死去後、カリフ選出会議を招集し、その運営に当たる権限を有する。選挙権は各国支部の代表、各局長、最高位宣教師（Selection Grade, 終身制）にある。84年のカリフのロンドン亡命以降も、宗教長と総局長、教団組織本部はラブワに残る。

カリフを擁するロンドンには別置部がある。形式上はラブワ本部がロンドンの別置部より上位とされるが、実際はロンドンが実権をもち、各国支部からの報告書や財務関連の書類等はすべてまずロンドンを経由してラブワに送られる。また総局長へ直接連絡が許されるのは各国支部の代表以上のみである。教団の特徴の一つに、カリフへの直接連絡がすべての信徒に許されることがある。カリフへの直接連絡ができることと、総局長へのそれが制限されていることは、際立って対照的である。

アフマディーヤが非常によく組織された「官僚制」を備えた組織体であることは、組織図からも明らかである。専従の宣教師と、献身人材（後述、無償か廉価で教団運営を担う）がこれを担う。筆者はエジプトで約5年の調査経験があるが、途上国では組織があっても運用がからっきしで、実体としては機能しない行政機構、宗教団体が多い。しかし本教団は組織としてきちんと機能しており、日本支部およびロンドン本部の行政能力の高さには驚かされた。一定数の専従の宣教師を抱えていることがその理由の一つであろう。

注目すべきは統計局があることで、教団は近代国家のごとく、正確な統計をもつ。事務・人材局は献身人材の情報、ワクフェノー（後述、胎児のうちに献身人材として登録された人）の数のみならず、各国の信徒数、男女比など詳細な統計をもつ（ただし政治的理由で開示には積極的でない）。

局のなかでも規模が大きく発言力が強いのは宣教師を統括する海外宣教局と歳入歳出を管理する財務1局で、規模が小さく発言力も弱いのは農業局と商工業局であるという。教団には領土がなく、農業局と商工業局の発言権が弱いのは必然であろう。また資源として重要なのが人であ

ることも自明で、そのためアフマディーヤは人材育成に熱心である。

各国支部に目を移そう。どの国・地域でも国ごとにアフマディーヤは年次総会と参集会を年に各1回行う。ともにその国に住む信徒たちが一堂に会する貴重な交流の機会である。参集会は1年の活動報告、決算報告、時に役員選挙を兼ねる。国ごとに規模は異なるが、会の形式、内容、式次第等には普遍性があり、他国在住の信徒も違和感なく参加できる。教団の組織は国毎に15歳以下の女子部 (*Nasirat*)、15歳以上の女性部 (*Lajna Imaillah*)、15歳以下の男子部 (*Atfal*)、15歳から40歳までの男性からなる青年部 (*Khuddam*)、40歳以上の男性からなる男性部 (*Ansarullah*) の五つに分かれ、普段は個別に活動する。女性部長と男性部長は3年任期で成人信徒が200人以下の規模の国では直接選挙、それ以外では間接選挙で選出される。毎月、活動報告の国ごとの取りまとめと英国本部への送付が義務づけられている。年度の報告書も各部ごとに毎年本部に提出、年次総会や参集会の式次第も事前と事後に本部に報告される。報告書を出すと毎回ではないが3回に1回程度、本部から指示やコメントが返ってくるという。有職信徒は、毎月の収入の16分の1の寄付を義務づけられている。賃労働者以外の信徒からは一定額(低額)を毎月徴収する。その他随時目的ごとに寄付を募る。これらが教団の財源となる。長期にわたり納付のない者は除名処分になることもあるなど、メンバーシップはきちんと把握/管理され、信徒と非信徒の境界は非常にはっきりしている。日本の主任宣教師の娘(13歳)は、「(日本で)誰かが入信したら私たちには絶対にわかります。報告もあるし、知らないうちに誰かが信徒になっていることはありえない」(2015年11月)と断言した。

3.2 献身制度

二つの献身制度が併存している。一つはいつでも任意にできる献身 (*Waqfe-Zindagi*) で、献身した場合はその人物の来歴、資格などの情報が事務・人材局に送付・管理され、必要に応じて奉仕活動への参加要

請がくる。なお宣教師は全員献身者である。もう一つは前身の制度を、4代カリフが1987年に改革して整備したワクフェノー (*Waqfe-Nau*, ウルドゥー語で新しいワクフの意) 制度である。これは両親が胎児を献身者として届け出るもので、出生前登録が必須条件となる。出生後、特別教育プログラムを長年にわたり受講後、本人の自由意思で献身者となるかどうか選ぶ。胎児献身された個人も、制度自体もワクフェノーと呼ばれる。ワクフェノーは医者、教師、宣教師など、公共性の高い仕事に就くことが期待され、そのように育てられる。古いデータだが、2000/01年時点で20,515人(男子14,259人、女性6,256人)がワクフェノーとして登録されていた(Khurshid n.d.)。女性のワクフェノーは公共性の高い職業に就くことと同様に、宣教師との結婚や敬虔な次世代を生育することも推奨される。宣教師は途上国を含む地球規模での転勤がありえ、同伴する妻にも覚悟が必要なためである。献身者は功なり名を遂げた後、職を擲って教団のために病院を設立しその顔となったり、教団が設立した人道支援のための宗教色のないNGO、Humanity Firstの一員としてアフリカの医療支援を行ったり、本業の傍ら些少な報酬で教団運営に携わったりする。教団内では献身者の給料は、献身者以外と比べると同内容の仕事でも低額に抑えられる。

イスラーム研究の視点から興味深いのは、献身にワクフ (*waqf*) という言葉をあてていることである。ワクフは12世紀以降に東アラブ世界に、のちにオスマン朝にも広まった寄進制度である。それは個人が、自身が所有する資産(多くは不動産)に対して、売買や相続など所有権の移転にあたる行為を停止(*waqafa*, ワクフの語源)して財源とし、その収益を特定の慈善目的に費やす寄進制度で、イスラーム法上は慈善行為として位置づけられる(五十嵐 2011:16)。ワクフ制度は、それを通じた公共施設(学院、モスク、修道場、病院等)の建設と、財源のための商業施設や住宅の建設が都市の発展を支え(五十嵐 2011:16)、さらにはウラマー養成の財源となることでイスラーム文化をも支えた。歴史的なワクフ制度は、所有権が成り立つものを寄進することにその本質がある。

一方のアフマディーヤの献身制度は、自由人ないしその親が、自らないし子を寄進するもので、所有権が成り立ちえないものを財源とする。この点で、歴史的なワクフとは文脈が異なる。以前から教団内にあった献身制度を、ワクフというイスラームで古くからあった制度の文脈にひきつけて再解釈したと理解すべきであろう。信徒らは献身することを「ワクフする」と表現し、胎児献身された者をワクフェノーと呼ぶが、それはイスラーム史におけるワクフの重要性とも響き合う。教団が人材確保・育成を極めて重視していることがここからも明らかである。

3.3 宣教師

教団は1898年に信徒向けの学校を開学するなど、ごく初期から信徒の宗教教育に積極的に取り組む。1906年にインドのカーディヤーンに宣教師養成大学 (*Jāmi'a Ahmadiyya*) を開学、2016年現在、パキスタン、インド、ドイツ、英国、カナダ、ガーナの6カ所に、寮完備の宣教師養成大学を擁する。なお女子部 (*Aisha Dinyat Academy*) はパキスタンとカナダにある。カリキュラムは、移民2世が多い欧米ではウルドゥー語とアラビア語、パキスタンでは英語やフランス語を重視するなど注力する言語が異なる以外、ほぼ共通である。宣教師養成大学は9～12年以上の初等教育修了者が対象の7年制、共通カリキュラムにより、均質性を担保した質の高い人材を継続的に輩出することが可能となった。卒業生は専従の宣教師として世界各国に派遣され、各地の組織運営と宣教を担う。教団が開発支援に重点を置くアフリカ各地、インドネシア (2015年より養成大学に昇格)、パキスタン、インド、バングラデシュなどには3年制の宣教師養成短期大学 (*Jāmi'atul Mubashireen*) が置かれ、現地出身の学生たちの教育を担う。短大卒の学生も宣教師となるが、いわばローカル・スタッフの扱いで、その転勤範囲は限られる。宣教師は組織運営と宣教とを担う、組織内外に責任をもつ教団の「官僚」であり顔である。彼らは家族を伴って世界中のアフマディーヤ・コミュニティを、まさにアンダーソンの『想像の共同体』(Anderson

1991)におけるクレオール役人のごとく遍歴する。

教団は早くから出版・メディアにも力を入れてきた。信徒向の週刊新聞 *al-Hakam* は 1897 年から、教団発行の週刊誌 *Badr* および英語版の月刊誌 *the Review of Religions* は 1902 年から、日刊紙 *al-Fazl* は 1913 年から刊行され、*al-Hakam* を除く 3 誌は今も公刊されている¹³⁾。ごく初期から、教団が出版物を通じた布教や信徒意識形成に積極的だったことがわかる。出版技術は「想像の共同体」たる国民国家の出現を支えたが (Anderson 1991)、同様の可能性を、本教団の出版、翻訳、TV 放映などに見ることができよう。本教団の出版物は多言語対応で、その流通範囲は特定の言語の言語圏に限られない。そこに最大の特徴があり、多言語メディア戦略は、国境や言語、民族を超えて広がろうとする彼らの志向をよく表している。

宣教師が世界中を転勤、巡回しつつローカルな信徒共同体を率いること、多言語衛星放送の提供 (あるいはそこで殉教などの悲報が共有されること)、象徴としてのカリフの存在などにより、アフマディーヤ・アイデンティティ——入信により獲得可能という意味で民族的でも閉鎖的でもなく、ディアスポラ状況を反映した「地域的でも政治的でもなく、言語に基づかない」アイデンティティ——は構築される。アフマディーヤは多言語、多民族集団で、信徒たちはバラエティに富む。当然、アフマディーヤ・アイデンティティには入信経緯や出身地域、ジェンダーなどによる濃淡がある。多様な信徒をゆるやかにまとめる装置として、カリフ制、宣教師＝官僚制度、献身制度、年次総会、多言語メディアは機能しているといえよう。

4. カリフ、制度化されたカリスマ

カリフは終身制で、教団の象徴かつ最高責任者、対外的な顔である。カリフは現世で最も神と近い人間と考えられている。カリフ制の採用は、ウェーバーの有名なカリスマ論に照らせば、イスラームの伝統に

則った「カリスマの日常化」の試みであると解釈しうる。教団のカリフ制は、互選制でバイア (*bay'a*、忠誠の誓い) 儀礼を伴う歴史上のカリフ制に擬し、選挙制でバイア儀礼を行う。前述のように初代カリフは開祖と血縁関係がないが、初代以降の2～5代カリフは開祖の子孫である。また5代カリフの妻は彼のいとこで、2代カリフの孫娘であり、開祖の曾孫にあたる。彼女を血統ゆえに特別視するなど、信徒には血統を重視する傾向がある。イスラーム世界には預言者ムハンマドの子孫を特別視する慣行があるが、同様に教団には開祖の血統を特別視する傾向がみられる。

ただし、2～5代カリフが開祖の子孫なのは「偶然」と説明される。カリフのカリスマは、実態としては「世襲カリスマ」と「官職カリスマ」(ウェーバー 1962)の複合体だが、宣教師や養成大学の学生など、教団の公職にある者は一貫して、カリフのカリスマや特別な能力は、カリフ個人や血統ではなく、カリフ位への神の祝福 (*baraka*) によると語る。ただし宣教師が血統に言及することも皆無ではなく、公式見解はさておき、血統が重要な要素の一つであることも窺えた。現カリフについてある60代女性は「彼は最近はいよいよカリフらしくなった。先代がいらした頃はそうでもなかった」と評した(13年3月)。英国の宣教師養成大学の某学生(男性、20代)は「カリフ位に選ばれるということは、その人にはもともとそれに見合う強い輝きが備わっていたということです。その意味では彼は昔から特別でした。しかしカリフになってからは、一層の輝きや愛や祝福が神から贈られます。カリフになることで、彼の聖性は特別なもの、比類ないものとなるのです」(13年9月)と語った。二つの語りのなかで、カリフ位と個人としてのカリフが区別されていることに注意されたい。

カリフは現世の人間のうちで最も神と近く、最も神に愛され、祝福されていると信じられている。カリフを通じて神の祝福に与ろうとして、信徒たちはカリフの食べ残しを争って食べ、カリフが使った食器を大切にし、カリフが指を入れて祝福した蜂蜜を食べると妊娠できたり健康でいられると信じ、彼を送迎した車を家宝にする。これらはイスラームの

聖者信仰を彷彿とさせる。

ただし、カリフのカリスマは近代的な文脈で表れる。それは限定的で、死の病を癒すなどの奇跡を起こせるわけではない。強調されるのは信徒への愛と献身、そして超人的事務処理能力である。莫大な量の仕事と信徒からの大量の手紙を短時間で捌き、その内容を覚え対話し、信徒のために深夜まで祈るのを惜しまないなど、職責の中身は非常に官僚的かつ近代的である (MTA 2016)。カリフがこれをこなせるのは、神に祝福され、授けられた特別な能力ゆえであるとされる。

カリフは各国支部を年次総会やモスク開堂などの機会に積極的に訪れ、信徒の結束強化や一体感の醸成につとめており、毎年平均で4、5カ国の巡回訪問をこなす。訪問先はカナダやドイツなど欧米の移住先と西アフリカが多いが、日本やオーストラリアにも訪問実績がある。パキスタン等政治的理由で訪問できない国もある。2008年にはカリフ制100周年記念行事の一環として、カリフは3週間かけナイジェリア、ベニン、ガーナを訪れ、ガーナとベニンで当時の大統領と公式に会談した (Jama' at Ahmadiyya 2008)。巡回訪問はもちろん戦略的なもので、一種の宣伝・広報・ページェントである (cf. フジタニ 1994)。直接カリフと会う機会が結束や信仰の強化に多大な影響を与えることは、調査から十二分に窺えた。またカリフは世界のどこにいても、毎週の金曜説教を欠かさない。金曜説教は教団の衛星TV局、MTAを通じ世界に放映・配信される。金曜説教と巡回訪問が、信徒向けの公的儀礼にあたる。地球規模で点在する信徒のアフマディーヤ・アイデンティティの維持・強化、一体感の醸成に、カリフの存在とカリフ制、公的儀礼としての巡回訪問、金曜説教は大きな役割を果たしている。

しかしカリフと信徒の関係で特筆すべきは、個々人の信徒とカリフとの私的な紐帯の強さである。カリフと信徒との距離の近さには驚くべきものがある。信徒にとってカリフは雲の上の存在でありながら、同時に近い人でもある。カリフ自ら信徒の縁談をまとめることもある。なお教義上、信徒は非信徒とは結婚しない。巡回訪問の際は、家族単位で信徒との面会 (*maqāmāt*) が行われる。これは英国ではカリフの日常業務



写真4 2世たち。中央の子供は、日本国旗をモチーフにした、カリフ来日に合わせたいでたち

の一つである。面会でカリフは信徒たちに気さくに話しかけ、祝福を与え、子供たちにペンやチョコレートをあげ、時には冗談を飛ばす。2015年に、カリフが愛知県津島市で行われたモスクの開堂式のために来日した際は、面会目的で韓国、マレーシア、インドネシア、アメリカ、オーストラリア等から約140人の信徒が日本を訪れた。日本はカリフが巡回訪問する国々のなかで信徒規模が最も少ないため、面会のチャンスが多いと考えた信徒たちが、カリフに会うためだけに来日したのである。

面会は信徒にとっては特別で忘れがたい経験である。2015年のカリフ来日時、博士号を取得するため、たまたまパキスタンから来ていた薬学専攻の博士課程在学中の20代女性は、日本で偶然カリフに会える感激をこう表現した。「私の家族でカリフに会うのは私が最初！だから家族みんなとても幸せ。私は全然、日本に来る時はカリフに会えるなんて夢にも思わなかった、博士号取得のために来たから。でもその後、カリフがいらっしやると聞いて、なんてラッキーなんだろうと思って心底嬉しかった！会ったら…どう思うかな、想像つかない。一言も話せないか



写真5 カリフからの返信

もしれない…」(2015年11月)

面会以外にもカリフとの連絡手段は開かれていて、信徒たちは自由にカリフに手紙やメール、ファックスを出せる。ロンドンの翻訳局が翻訳を担うため、信徒はどの言語で手紙を書いてもよい(なんと日本語も可能)。子供から大人まで、頻度は個人により様々だが、手紙での個人的な悩みごとの相談は信徒にとっては日常行為である。手紙は任意で、個人が属する支部を通す必要もなく、手紙の頻度や内容が所属先支部に知られることはない。テストのこと、コーランを一通り読み終わった報告、進路相談、結婚、移住の可否や場所や時期、子供の名づけ、不妊や妊娠・出産、商売、ありとあらゆることを、信徒はカリフに相談し、神への取りなしと祈祷を依頼する。カリフからも、毎回ではないが直筆署名入りの返事がくる。特に相談ごとや名づけ等、具体的な悩みの場合には必ず返事がある。面会の席で手紙を書くよう促されることも、かつての手紙の内容について助言を貰うこともあり、カリフの記憶力と配慮に驚嘆する信徒の姿を何度も見た。

信徒たちはカリフからの手紙を大切に保管する。多い時で月に2回、月に一度は必ず書くというA(60代女性、パキスタン生まれ、千葉県在住)から、「昔は2週間に一度は絶対書いてたけど、最近は大学が忙しくてさぼりがち」というB(20代女性、大学生、日本生まれ、愛知県在

住)まで様々な信徒に会ったが、共通するのは「カリフが自分を見てくれる、自分のことを知っていてくれる」という強い確信である。2015年11月のカリフ来日の際、カリフに挨拶しなくていいの?と聞いた時の、Bのコメントがそれを象徴している。彼女は名古屋弁で「カリフはうちのことよく知っとるもん。もう全部知っとる。いっつも手紙書いてるから」と言った。信徒からの大量の手紙を日々捌くカリフが、そのいちいちを覚えているとはにわかには信じがたい。しかし神の祝福のおかげで、カリフにはそれができると信徒は信じている。信徒はカリフと会って話し、カリフとの個人的なつながりを感じ、カリフが自分を覚えていてくれると確信する。心理的に信徒とカリフの間が非常に近いことは注目に値する。カリフの紹介で結婚した20代女性(ドイツ生まれ、10歳時英国に移住、結婚後日本に移住)は「カリフが私のために特別に選択礼拝(*istikhāra*、主流派ムスリムも行う、選択を神に委ねるために行う礼拝。この礼拝の後、夢など何らかの形で神意が伝達されるとされる)をなさったうえでお決めになったから、この結婚はパーフェクトだと思った。即答でOKしたし、実はその時点で相手の男性をまだ見てもいなかった(笑)」と語った(16年9月)。

これは大変ユニークな組織形態である。高度に組織化された組織でありながら、個々人のトップへの個別のアクセスが保証されているからである。前述のAはパキスタン出身で、日本人男性と国際結婚し2人の子供がいる。子育て中は夫の家族との付き合いの関係上、寄付は支払うものの教団行事に参加できなかった時期が5~6年ほどあったが、彼女はその間もカリフに手紙を送り続けていた。オーストラリア在住のAの兄が当地でカリフと面会した際、カリフが「あなたの妹が日本にいるのは、よく手紙をもらうから知っています」と応答したそうである。居住地の教団と密につながれずとも、カリフへの手紙が教団とのつながりを保証する代替手段となるケースがあることがここから窺える。2015年のカリフ来日時、顔を見せた信徒のなかには、普段は教団の儀礼に参加しない者も一定数いた。そのような信徒たちも、カリフ来日とあらば集まり、面会し、感激するのである。

迫害により活動に制限が多い地域の信徒や、組織に諸事情でつながれない信徒、支部のない地域の信徒をも包摂するしくみとして、カリフの存在や、彼と信徒の間に直接の回路がある意義は大きい。共同体のなかでこぼれおちそうな人々を組織に包摂（あるいは再包摂）するしくみとしても巧妙で、有効に働いている。教団は高度な組織化によって組織の安定を図るとともに、カリフと信徒との心理的距離を近くすることでその宗教心を掻き立てるしくみとを併置することで、うまくバランスをとっているといえよう。

その他カリフには、不本意な結婚をさせられそうな女性たちの、いわば駆け込み寺的なユニークな役割がある。パキスタンの文化では両親が子供の結婚に責任と決定権をもつ。パキスタン系信徒はその文化を移民先でもよく保ち、日本や英国でも結婚は両親が主体となって決める。その際、問題になるのが女性の同意の有無である。イスラーム法では、父は処女 (*bikr*) に対し婚姻強制権をもつため、結婚に関する女性の意思は法的には効力をもたない (柳橋 2001: 17, 81-82)。しかし、父およびその他の者は、処女や非処女 (*thayyib*) をその同意なしに結婚させてはならないというハディースもある¹⁴⁾。このハディースが (厳密な法解釈の細則を離れて) 人口に膾炙していることもあって、一般にムスリムは、結婚には女性の合意が必須であると考えている。それはアフマディーヤでも同様である。しかし親が同意の確認をおろそかにし、娘がその結婚を望まない場合もある。そのような時女性が取る一般的な手段は、カリフに手紙で事情を訴えることだという。カリフは手紙をもとに支部を通じ介入し、結婚を取り止めさせる。未婚女性たちは、両親に訴えるよりカリフに訴える方が心理的に楽だしやりやすい、という。ともに暮らす両親よりもカリフの方を近く思う心理を筆者は不思議に感じるが「カリフは、お父さんみたいなものだけど、お父さんよりずっとずっと大きい、もっとお父さんみたいな？」(2015年11月) という、日本に暮らすある2世の小学生の言葉が、彼らの感覚をよく示しているかもしれない。

この事例は、カリフの権威が家父長制に基づく慣習やジェンダー不平

等を正す例外的機構として、組織のなかで機能していることの一例である。カリフと信徒が直接つながれる構造がこれを可能としている。また教団は教団内のDV予防に組織的に取り組み、女子教育を推奨する。2015年にドイツで信徒による名誉殺人が起きた後には、カリフは金曜説教などの機会を捉えて、名誉殺人を強く戒めるメッセージを何度も発した。しかしこれらを、女性のエンパワーメントや地位の向上に教団が積極的である証と捉えるだけでは楽観的に過ぎる。もっと多角的・複合的に考える必要がある。例えば2世の宗教アイデンティティの確立は、グローバル化に伴い教団の喫緊の課題となった。そして異文化のただなかで育つ子供たちのアフマディーヤ・アイデンティティを構築するうえで、女性たちは戦略上、非常に重要である。教団が女性達を巻き込む必要がここにある。また信徒女性は結婚に伴う国際移動により、家族やその他資源と切り離され、弱い立場に置かれやすい。しかし非信徒との結婚を禁じる以上、結婚による女性の国際移動は不可避である。それを円滑に進めるための手段の一環として、教団は様々な方策を講じる必要があると考えられる。

5. ポスト国民国家時代の、グローバルかつローカルな宗教共同体

これまで、グローバルでありつつ、同時にローカルな相互扶助の機能をも併せもつ宗教共同体としての教団を、信徒の語りを交えて描いてきた。

教団は領域に拘らず、多言語戦略を取り、近代的価値観によく適合し、政教一致をめざさない。しかし詳細な統計と、多言語・多角的メディア展開、宣教師による「官僚制」などにより、(近代国民国家にも似た)「信仰の共同体」を作り上げた。これらの要素は極めて近代的で、その意味で教団はまさしく近代の産物である。また政教分離、国家尊重、平和主義の姿勢は、ホスト国家との関係を良好に保つうえで有利に働いた。

宗教共同体としての求心力を支えるのは、カリフ制とカリフの存在、人材育成制度や献身制度（とそれに伴う子供たちへの制度化された宗教教育）、散発的に特定地域で起こる迫害事件¹⁵⁾と教団メディアによるその報道などであろう。信徒たちが様々な価値観が並存する移民先でアフマディーヤ・アイデンティティを維持、更新、あるいは構築できる理由としては、これらの制度と、各国支部内の人と人との密なつながり、およびそれを強化・更新する機会となる参集会や年次総会、断食明け・巡礼明けの大祭など行事への参加が大きい。

ユニークなのは、グローバルに展開する教団が、出身地域の文化や土着性を強く保ち続けていることである。例えば公的行事では、金曜説教や詩の朗読が開祖と歴代カリフの母語、ウルドゥー語でなされるなど、ウルドゥー語の使用頻度が高い。そのためコーランの言葉、アラビア語の優位性が他のイスラーム系教団よりも相対的に低い。カリフの服装や尊称、官職名などにも地域色が色濃い。パキスタン系信徒はそのパキスタン性（民族衣装の着用、男女隔離の実践、家庭でのウルドゥー語やパンジャービ語の使用など）を移住先でもよく保つ。メンバーシップや結婚を管理することで、教団はホスト社会への過度の適応や同化に一定の歯止めをかけようとしていると言えよう。教団は明らかに、ホスト社会への同化ではなく、独自性を維持したままの共生を志向している。

本稿では、グローバル化を体現する宗教共同体としてアフマディーヤを一つの組織体とみなし、便宜上教団を一枚岩的に扱った。しかし当然ながら、教団の歴史やカラーは国・地域によってそれぞれ異なる。例えばアメリカでは、アフマディーヤは主に黒人に浸透し、一般に黒人の宗教とされる。西アフリカでは、教育や衛生的な水など生活に不可欠な資源を提供する開発機関としても認識されている。英国では、穏健かつよく組織された本教団は、ムスリムとの連帯を示す際の体のいいカウンターパートとして政治的価値を有する。英国での年次総会には毎年首相が祝辞を寄せ、閣僚が臨席するなど、政府と良好な関係を築く。一方でパキスタンやインドネシアでは異端として有名で、しばしば迫害される。信徒を取り巻く社会状況は様々である。

信徒の民族、母語、居住地、出身地、階層、移民経験などの属性も多様である。教団の一体性はひとえに信仰とカリフへの忠誠に由来するものの、入信の経緯、母語、居住地、年齢、ジェンダー等によって、最も重要とされる信仰に濃淡があることすらあらかじめ想定されている。つまりスピヴァクの戦略的本質主義的な意味においても、均質で一枚岩的、本質的なアイデンティティを共有する集団など、本人たちによってすら想像／創造されていない。

かくも多様な集団を包摂するグローバルな宗教共同体として、アフマディーヤはある。本教団は国民国家というシステムの綻びが否応なく可視化される今という時代に、国民アイデンティティを超え、あるいはそれと共存するグローバルなアイデンティティのあり方や、グローバルでありつつ、同時にローカルな相互扶助の機能をも併せもつ共同体の可能性について、我々に豊かな示唆を与えてくれる。

謝辞

主任説教師のアニス・アハマド・ナディーム氏をはじめ、調査に協力し、私と多くの時間を分け合ってくれた日本アフマディーヤ・ムスリム協会の全ての方々、特に女性信徒たちに深謝します。本研究はJSPS科研費 26770291 の助成を受けたものです。

参考文献

Al-Islam (教団 HP, <https://www.alislam.org/>, 2016.9.30)

Ahmadiyya Muslim Community, *An Overview*, n.d. (<http://www.alislam.org/introduction/index.html>, 2016.9.30)

Anderson, Benedict, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. London: Verso. 1991.

Asad Shah killing: Man admits Glasgow Shopkeeper Murder, BBC News,

- 2016.7.7. (<http://www.bbc.com/news/uk-scotland-glasgow-west-36733744>, 2016.9.30)
- Berberian, Linda J., "Pakistan Ordinance XX of 1984: International Implications on Human Rights," 9 *Loyola of Los Angeles International and Comparative Law Review* 661, 1987. (<http://digitalcommons.lmu.edu/ilr/vol9/iss3/5/>, 2016.9.30)
- Bukhārī, *al-Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*. (<http://hadith.al-islam.com/Loader.aspx?pageid=194&BookID=24>, 2016.12.14)
- Gualtieri, Antonio, *The Ahmadis: Community, Gender, and Politics in a Muslim Society*. London: McGill-Queen's University Press. 2004.
- Jama'at Ahmadiyya, *The Khilafat Centenary Tour of West Africa*, 2008. (<http://www.alislam.org/press-release/Khilafat%20Centenary%20Tour%20of%20West%20Africa.pdf>, 2016.9.30)
- Khurshid Ahmad, *A Brief History of Ahmadiyya Muslim Community*, n.d. (<https://www.alislam.org/library/history/ahmadiyya/index.html>, 2016.9.30)
- Labeebgondal, *History of Rabwah*, 2016 (<https://labeebgondal.wordpress.com/2016/05/25/history-of-rabwah/>, 2016.9.30)
- MTA International *Documentary: Huzur and Jalsa Salana*, 2016.8.15 (<http://www.mta.tv/jalsa-salana/documentary-huzoor-and-jalsa-salana>, 2016.9.30)
- Muslim, *al-Ṣaḥīḥ al-Muslim*, (<http://hadith.al-islam.com/Page.aspx?pageid=192&TOCID=623&BookID=25&PID=2617>, 2016.12.15)
- Pakistan Bureau of Statistics, *Pakistan Statistical Year Book 2014* n.d. p. 342 (<http://www.pbs.gov.pk/content/pakistan-statistical-year-book-2014>, 2016.9.30)
- Rules and Regulations of Tahrik Jadid Anjuman Ahmadiyya*. Rabwa: Tahrik Jadid Anjuman Ahmadiyya in Pakistan, 1997.
- Sajid Iqbal and Noel Titheradge, "Kill Ahmadis' leaflets found in UK mosque," 10 *April 2016.BBC News* (<http://www.bbc.com/news/uk-35928848>, 2016.9.30)
- Smith, Wilfred Cantwell, "Ahmadiyya." In *Encyclopedia of Islam*. C. Bosworth (eds.), 1: CD-ROM Edition. 1960.
- Valentine, Simon Ross, *Islam and the Ahmadiyya Jama'at: History, Belief, Practice*. New York: Columbia University Press. 2008.
- 五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進—後期マムルーク朝の研究』刀水書房, 2011年.
- ヴィヴィオルカ, ミシェル『差異—アイデンティティと文化の政治学』法政大学出版局, 2009年.

- 小杉 泰「ムスリム」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002年, 969-970頁。
佐々木拓雄「中道派イスラームの政治—インドネシア・ユドヨノ政権とアフマディーヤ問題」『久留米大学法学』64, 2010年, 17-53頁。
ナディーム, アニス・アハマド『仏陀が再来した朗報』日本アフマディーヤ・ムスリム協会, n.d.
フジタニ, タカシ『天皇のページェント』日本放送出版協会, 1994年。
保坂修司「アルカイダからイスラーム国へ」『世界』887, 2016年, 79-87頁。
星野英紀・櫻井治男「そもそも「地域共同体の解体」とは?」『現代宗教2017』, 2017年
マックス・ウェーバー『支配の社会学Ⅱ』創文社, 1962年。
嶺崎寛子「東日本大震災支援にみる異文化交流・慈善・共生—イスラーム系NGO ヒューマニティ・ファーストと被災者たち」『宗教と社会貢献』3-1, 2013年 a, 27-51頁。
嶺崎寛子「ディアスポラの信仰者—在日アフマディーヤ・ムスリムにみるグローバル状況下のアイデンティティ」『文化人類学』78-2, 2013年 b, 204-224頁。
嶺崎寛子「地元とも世界ともつながる場所—愛知県津島市, 「異端」のモスク」*Migrants Network* 187, 2016年, 32-34頁。
柳橋博之『イスラーム家族法』創文社, 2001年。

注

- 1) アフマディーヤの先行研究は (Gualtieri 2004; Varentine 2008; 嶺崎 2013a, 2013b, 2016; 佐々木 2010) など。なお本稿の文章のごく一部は (嶺崎 2013b) と重複する。
- 2) 詳細については (嶺崎 2013b) も参照されたい。
- 3) <http://www.alislam.org/introduction/index.html>, 最終閲覧日 2016.9.30.
- 4) <http://www.alislam.org/introduction/index.html>, 最終閲覧日 2016.9.30.
- 5) <http://www.alislam.org/introduction/index.html>, 最終閲覧日 2016.9.30.
- 6) <http://www.alislam.org/khilafat/fifth/masroor-summary.html>, 最終閲覧日 2016.9.30
- 7) *Pakistan Statistical Year Book 2014* n.d.: 342
- 8) BBC News 2016.4.10
- 9) BBC News 2016.7.7
- 10) <http://www.alislam.org/introduction/index.html>, 最終閲覧日 2016.9.30.
- 11) <http://www.alislam.org/affiliated-websites.php>, 最終閲覧日 2016.9.30.
- 12) <http://www.alislam.org/introduction/index.html>, 最終閲覧日 2016.9.30.

- 13) <https://www.alislam.org/library/history/ahmadiyya/21.html>, 最終閲覧日 2016.9.30.
- 14) Bukhārī, *Ṣaḥīḥ*, No. 4843, 4844. Muslim, *Ṣaḥīḥ*, No. 1419~1421.
<http://hadith.al-islam.com/Page.aspx?pageid=192&TOCID=2849&BookID=24&PID=4940,4941>, <http://hadith.al-islam.com/Page.aspx?pageid=192&TOCID=623&BookID=25&PID=2617>, 最終閲覧日 2016.12.14.
- 15) 2016年12月5日、教団のパキスタン本部、ラブワの教団建物に州警察が踏み込み、スタッフを逮捕・連行した。今までは過激派がアフマディーヤ迫害の急先鋒で、取り締まらないなど不作為的な国家の関与はあったが、国家権力は暴力の直接の行使者ではなかった。パキスタンにおけるアフマディーヤ迫害は深刻度を増し、新たな局面を迎えたといえる。